

令和元年（2019年）5月17日（金曜日）

20年にわたり地道な清掃活動が続けられている「三島梅花藻の里」＝三島市南本町



GW三島

ミシマバイカモを再生 地道な清掃20年

清流のバロメーターとされる希少な水生生物「ミシマバイカモ」の再生に取り組むNPO法人グラウンドワーク三島が、「三島梅花藻の里」（三島市南本町）で続ける地道な清掃活動が、20年の節目を迎えた。長年にわたり市民ボランティアらが毎週欠かさず、協力して汚れを取り除く保全活動に汗を流し、「水の都・三島」にふさわしい美しい水辺の環境を整え続けている。

美しい水辺へ 市民が毎週奉仕

ミシマバイカモは水温が一定（15、16度）で、日当たりの良い清流でないと生息できず、県レッドデータブックの絶滅危惧2種に指定。キンポウゲ科の多年草で、梅に似た白い花を咲かせる。楽寿園の小浜池で発見された。三島梅花藻の里の整備は約25年前、かつて養魚場だった佐野美術館所有の湧水池を借

り、ミシマバイカモが生息する柿田川の環境団体の協力で、現在の同NPOがバケツ4杯分を移植したのが始まり。
16日の活動には、インストラクターを務める市民ボランティアや同NPOスタッフらが

参加し、汚れたり、腐りかけたバイカモをほうきで丁寧に掃き集めた。同時に、外来の水生植物を間引く作業も行った。
渡辺豊博専務は「三島の一つの宝として、希少性を守り続けていかなければならない。単純と思われるような作業だが、ボランティアの皆さんの力も借りながら継続し、途絶えさせないことが大切と考えている。源兵衛川への移植も続ける」と話している。